

2017年 平和首長会議 青少年「平和と交流」支援事業に参加して

菅原日向子（秋田県秋田市）

私は秋田市の代表派遣者としてこの青少年「平和と交流」支援事業に参加しました。家族とともに生涯東北暮らしの私にとって、広島・長崎を72年前襲った原爆とは「他のどこか」で「何十年も前」に起こった出来事のように、自分にとっては遠いものと漠然ととらえていました。しかし、昨年広島を旅行で訪ねた際、平和記念資料館の展示を見ると、知らないうちに目には涙があふれ、それは日本人のみならず、人類が決して忘れることのできない瞬間であると気が付きました。それがきっかけとなり、原爆やその被害について正しく学び、世界の国々からの参加者と意見を交わすことのできる機会を持ちたいと考えました。

広島市立大学での講義で、私は原爆の歴史に関する様々な事実やその出来事を捉える新たな視点を学びました。ある授業では科学的な側面から核について学び、またある授業では各国における原爆の報道の仕方に違いがあるということなど、多角的に学ぶことはとても勉強になり、興味深かったです。しかしそれ以上に印象的だったことは、その歴史の保全に努める人々の姿を実際に目にしたことでした。例えば、自身で団体を立ち上げた渡部朋子さんは、設立当初は自分一人だったが、その熱意に応えるようにだんだんと人が集まるようになったと話されました。私自身もこのプログラムが終わってもなお、自分一人の力は小さすぎると感じることもあります。しかし、自分一人が始めたことが少しずつ広まり、それが時には世界を動かす大きな力にもなり得るのだとも信じていることができるようにもなりました。

また他の保全に努める方の中で、被爆体験の語り部の方々の努力や熱意は大きいと思います。愛する故郷が一瞬にして焼け野原に変わってしまったあの瞬間を思い出す悲痛さには、想像するだけで胸が痛みます。しかし語り部の皆さんは、それを乗り越え、私たちに当時の話をしてくださいました。私自身も宮城県で東日本大震災を経験し、震災の教訓などを次世代に繋ぐ役割も担うため、今回プログラムでお話しを伺ったお二方の活動に対する思いやその意義深さには強く共感しました。

私たちが平和の継承のためには原爆など戦争の歴史について正しく学ぶということと、それを心に留めるということが必要ですが、日本での取り組みには大きく地域差があると思います。広島市の小学校では総合の授業で六年間通して原爆被害について学ぶと聞きましたが、私が宮城県の小学校で習ったのはせいぜい一、二時間の社会の授業でのみです。しかし例えばそれを社会の授業だけでなく、国語や図工の授業でも工夫して学ぶ機会を設ければ、子供たちは原爆についてより深く多角的に考えられると思います。夏休み前にこうした時間を少しでも作れば、各家庭でも核や平和に関して考える機会ができると思います。ですから、平和首長会議では、被爆地から遠い地域との連携をより深めることが求められるのではないかと考えました。

私個人に何ができると考えた際、まずは今回のプログラムでの経験を大学や地域で共有することが不可欠だと感じました。特に私の大学には世界各国からの留学生もたくさんいるので、彼らも交えて意見交換などができれば、非常に良い機会となると思います。来年には、秋田市で開催される原爆被害の講話会にも参加予定で、そこでこのプログラムで学んだことの共有や秋田市、秋田市民の方々に提言ができるのではないかと考えています。また将来は、今回このプログラムで私が経験したように、異なる文化を持つ人と人との交流の促進に貢献できるような仕事につきたいと考えました。個人単位での違う国の出身者との交流を通してその国に対する偏見や誤解を払しょくすることは、世界の平和の醸成に大いに貢献できると考えるからです。